

---

---

# □ レコード (CD&DVD)

諸 石 幸 生

---

2015年度のCD界を振り返るとき、かつての全盛期に於いては、当たり前のごとく存在していたCDの宣伝材といったものがなくなり、お店に於いても、あまり宣伝をしなくなってきたように思われる。確かにCDは不況であり、かつてのキャラバンもいなければ、三大テノールのような人気アイテムもはやなく、知る人が知る、といった状況である。CD不況が叫ばれているように、確にかつてのような勢いは見られない。

だが、私たちが扱うのは、クラシックという、いわば、既に私たちの生活の一部となっている音楽を主な対象としているのであり、そもそもヒット曲や流行とはかけ離れて、存在している分野である。CD不況などとは、離れて語られるべき分野かもしれないのである。

また、こうした状況をさらに不透明にしているのが、クラシックのソフトの多様化である。CDの形態一つを見ても、一般的なCDに加えてSACDやBDといったように種々様々であるし、こうした状況に加えて、音楽を高い音質できけるようにした配信による鑑賞形態も、現在は、普及の過程にある。さらに若い世代にとっては、音楽は本来ただで鑑賞できるものであり、CDを聴くためのCDプレーヤーそのものに対する関心や興味がなく、そもそもCDプレーヤーそのものをもっていないという層も増えてきているという。筆者などには、考えられない状況であるが、こうした動きがあることを私たちは知っておくべきであろう。

さて例年のアカデミー賞であるが、大賞はアーノンクールがベルリン・フィルを指揮して行ったシューベルトの交響曲全集に輝いた。これは、アーノンクールが2003年から2006年にかけて行ったライブ演奏であるが、アーノンクールは、広く知られる

第8番の「未完成」や第9番の「ザ・グレート」以上に初期の交響曲にこそ若きシューベルトの創意と工夫、情熱と夢といったものが網羅されているとして、シューベルトに対するこれまでの見方を変えている。それは時代に照らし合わせても、最先端の音楽であり、時代を超えていたという主張もよくわかる演奏である。

大賞銀賞はオペラ部門からヴェルディの「アイダ」全曲盤である。2015年の2月、ローマの聖チェチーリア音楽院ホールで収録されたものであり、これは、イタリアの歴史的な名作をパッパーノ以下の優秀な人材を一堂に集めて録音したものである。また、こうした不況下においてスタジオ録音されたものであり、パッパーノ自身が、「アイダは特別な作品であり、演奏者には、音楽性、正確性、美しさ、そして演劇性が求められる。私は、素晴らしいソリスト・チームに恵まれたし、さらにローマ聖チェチーリアのオーケストラと合唱団に囲まれてしあわせでした」と語っているように、指揮者自らが幸せを噛みしめる録音となったと語っているほどである。

そして大賞の銅賞部門には、ポーランドのルトスフスキのピ

アノ協奏曲が選ばれた。

これは、ツィメルマンのピアノにラトル率いるベルリン・フィルが共演したものである。この曲は、1989年にツィメルマンのピアノ、作曲者の指揮で録音されている。今回は、24年ぶりの再録音となるものだが、苦難の時代から20年以上を経ての録音は、「確実に、以前の録音とは異なるものとなっている」とツィメルマン自身が語っているように、完璧で、しかも鮮烈な演奏として完成されている。さすがにツィメルマンならではの緻密にして、雄弁なる説得力を併せ持つ演奏である。

この他、大賞以外の部門賞には、フィリップ・ジョルダン指揮バリ国立オペラ座管弦楽団他によるラヴェルの「ダフニスとクロエ」が管弦楽部門、ルノー・カビュソンとフランク・ブラレイによるベートーヴェンの「ヴァイオリン・ソナタ全集」が室内楽部門、声楽部門では、プロコフィエフの「イワン雷帝」がソビエト指揮ベルリン・ドイツ交響楽団による演奏で、音楽史部門ではレイチェル・ボッジャーがブレコン・パロックとともにヴィヴァルディの「協奏曲集作品3『調和の靈感』」を録音したものが受賞した。ボッジャーなど筆者は以前にも受賞していたとの想いがあったが、何と今回が初めての受賞であるという。そして現代曲では、ペーテル・エトヴェシユの協奏作品集となった。エトヴェシユ自身がメッセージをよせている。それには「今回の受賞は、建設的なフィードバックに思われる。というのは、このアルバムを完成させるため8年の歳月をついやしたからである」というものであった。それは一枚のCDが世に出るために経験するであろう試練を思わせるものでもあった。

いずれにしても、アカデミー賞は今回53回を迎えた。既に半世紀以上の歴史を重ねてきた訳だが、その年度それぞれの優秀作が今なお名盤として愛されている事実に深い感慨を感じる。こうした歴史のその裏側には聴き手の人生とでもいべきか、聴き手がこれらの顕彰されたレコードやCDから受け取ってきたであろう喜怒哀楽までもを浮き彫りにする、そんな重みもあるように感じられる。ますますの発展と普及が待ち望まれるとともに、こうした作品の素晴らしさを若い世代の人たちに伝えていくことなども課題であろう。なお、去る2月に行われた第58回グラミー賞発表会で、3年前に我が国の松本で行われたサイトウ・キネン・フェスティバルに於けるラヴェル「子どもと魔法」が受賞したことが発表された。